

取り組んだユニットに○をしよう。

取り組んだユニット		ユニット		1		○
現代文・知識						
答え	問題番号	問一	①	表裏	②	誘導
			③	証拠	④	信頼
			⑤	一連	⑥	標識
			⑦	切断	⑧	動揺
答え	問題番号	問二	①	万	②	霧
			問三	①	(例) 一歩も後にひけない状況で、全力で事にあたること。	
				②	(例) ものごとは人に教えられるより、自分で体験するほうが早く身につくということ。	
				③	(例) まったく思いがけないことが起こり、驚くこと。	
問四	④	(例) 思いがけない幸運にあうこと。				
	①	エ	②	ウ		
③	ア	④	イ			

取り組んだユニット		ユニット		2		○	
現代文・知識							
答え	問題番号	問一	①	ア	②	ア	
			③	ア	④	イ	
			問二	①	過疎	②	慎重
				③	潜在		
問三	①	○	②	いただきます			
	③	○					
問四	①	イ	②	イ			

取り組んだユニット		ユニット		5		○	
古文							
答え	問題番号	問一	①	五月	②	十二月	
			問二	①	ヤ(行)下二段(活用)		
				②	タ(行)上二段(活用)		
				③	ハ(行)四段(活用)		
問三	④	ア(行)下二段(活用)					
	(1)	ア	(2)	(例) 答えることができなかった			
(3)	父						

1 現代文・知識

○漢字・四字熟語

問一 ③「シヨウゴ」の「根」は「根拠」などの熟語では「キョ」と読む。⑥「標識」の「標」は、形の似た「漂」「票」と区別しよう。「標」は「しるし」という意味があり、「しるしとなる立て札」から、部首が「きへん」だと考えることができる。⑧「動揺」は「ゆれ動くこと。平静を失うこと」の意。同音異義語に「童謡」があり、「子どもが歌うためにつくられた歌」という意味。

問二 ①「前代未聞」は「これまで聞いたこともないような、変わっためずらしいこと」。②「五里霧中」は「迷ってどうしたらよいか判断がつかず、見通しが立たないこと」。「霧」を「夢」と書かないようにしよう。③「波瀾万丈」は「変化がとても激しいこと」。

○ことわざ・慣用句

問三 ③「君が引越すとは寝耳に水だ」などと使う。

問四 ④「腹を割って話そう」などと使う。

2 現代文・知識

○抽象語

問一 ①直前の「あやふや」は「ものごとや態度があいまいではつきりせず、頼りない様子」という意味。②日本語では「修辭法」と言う。イは「トリック」のこと。③「畏敬」の「畏」には「恐怖」の「恐」と同じく、「おそ(れる)」という訓読みがある。④のア「涙を流すこと」は「落涙」と言う。

問二 ①「過密」は「ある場所や範囲に人やものが集中しすぎていること」、「過疎」は「非常にまばらなこと。ある地域の人口が少なすぎることに」。②「軽率」は「よく考えずに判断したり行動したりすること」、「慎重」は「注意深くて軽々しくしないこと」。③「顕在」は「はつきりとわかる形にあらわれ存在する

こと」、「潜在」は「表面にはあらわれず、内部にかくれて存在していること」。

おれえよう

外来語の抽象語の例

- ・アイデンティティ：「自分は何者か？」という自己定義。
- ・コンセプト：考え方、概念。
- ・コンプレックス：1心の中のしこり。 2 複合体。
- ・ノスタルジア：郷愁。なつかしむ気持ち。
- ・ユートピア：理想の社会。

○敬語

問三 ①「おくなる」「アくなる」「おくなる」「アくなる」などは、その行為をする人を高めて言う尊敬表現。使い方を覚えよう。②自分の行為について、「食べる」の敬語である「召し上がる」を使っているのが、間違い。ここは謙讓語を使って自分の行為をへりくだって言うのが適切。「食べる」の謙讓語は「いただく」である。

問四 ①「ご覧になる」は「見る」の敬語で、「見る」人への敬意を表す。ア・ウは場面としてよそよそしすぎる。②自分以外にも、自分の身内のことを客などに話すときには、身内の行為にも謙讓語を使い、へりくだる。「身内」には、時によっては家族や同じ学校の人、同じ会社の人なども入る。たとえその身内が自分より目上であっても、客の前ではへりくだるのが普通である。ア・ウはどちらも身内同士での場面なので、ふさわしくない。

ポイント

(例) 上司の山田課長について客の前で話す
↓「すぐに山田が参ります。」(上司である山田課長のほうが自分より目上だが、客の前では「参る」と謙讓語を使い、「山田」と呼び捨てにする)

5 古文

○古典常識・古文単語の意味・用言の知識

問一 旧暦での季節のとりえ方も覚えておこう。一月を「新春」と言うのは、旧暦の考え方にもとづいている。

問二 ① 終止形は「絶^絶ゆ」。「ズ」を付けると「絶えズ」で、「ウ」「エ」の段にわたって活用するヤ行下二段活用(え・え・ゆ・ゆる・ゆれ・えよ)。全文の意味は「流れる川の流^流れはとだえないでいて、しかも、(その水は)以前の(同じ)水ではない」となる。『方丈記』の有名な一節。② 終止形は「落^落つ」。「ズ」を付けると「落ちズ」で、「イ」「ウ」の段にわたって活用するタ行上二段活用(ち・ち・つ・つる・つれ・ちよ)。全文の意味は「木の葉が落^落ちるのも、初めに(木の葉が)落^落ちて(それから)芽を出しはじめるのではない」となる。③ 終止形は「合^合ふ」。「ズ」を付けると「合はズ」で、未然形活用語尾がアの段であるハ行四段活用(は・ひ・ふ・ふ・く・く)。意味は「ほんとうに今日の様子にととてもよく合^合つているのを、……。」となる。④ 終止形は「得^得」。「ズ」を付けると「え(得)ズ」で、①と同様の下二段活用。よって、ア行下二段活用となる(え・え・う・うる・うれ・えよ)。ここでの意味は「自分のものにする・嫁とする」。意味は「どうにかしてこのかぐや姫を嫁^嫁としたいものだ、……。」。「てしがな」は「くたいものだ・くたいなあ」という願望のこもった^{えい}嘆^{なげ}を表す。

○読解

【単語】^興興じき

問三 (1) 傍線部①は、

仏はいかなる一もの一にか一候ふらん

と分けることができる。

「いかなる」は形容動詞「いかなり」の連体形で「どんな」と疑問を表す。「に」は断定の助動詞「なり」の連用形。「か」は係助詞で疑問を表し、「候ふ」は「あり」の丁寧語で、「ございます」という意味の動詞。「らん(らむ)」は推量を表す助動詞で「〜だろう」という意味。ここでは、「か」の疑問の意味をもたせて訳す。全体の訳は、「仏とはどんなものでございましょうか」となる。よって、アが正解。その他の選択肢は、「いかなる」の訳が間違っている。なお、この文では、「か」の係り結びで文末の「らん」は連体形となっていることもおさえておこう。

(2) 「侍り」は他の動詞の下につくと、「〜です・〜ます」という丁寧の意味を表す。ここでもその意味で訳す。また、「つ」は「〜た」という完了の意味で訳す。「え〜ず」は「〜できない」と不可能の意味を表すので、この場合「答えられない・答えることができない」となる。全体の訳は、「答えることができなくなりました」となる。

(3) 傍線部③の主語は省略されているので、文脈からとらえる必要がある。本文では、最初の段落にはすべて「父」と筆者のやりとりが書かれている。筆者が「父」に問い、「父」がそれに答える形である。そして、最後の問いに対して答えた「父」が笑って、段落が終わるのである。

これをおさえて、第二段落に注目しよう。(2)で見たように、「問ひつめられて、え答へずなり侍りつ」と、諸人に語りて興じきは、「問いつめられて、答えることができなくなりました。」と、人々に語っておもしろがった」という訳になる。この文では、「おもしろがった」人は、「人々に語った」人と同じである。

おもしろがった(人)

=
「人々に語つ」た(人)

=
「答えることができなかつた(人)」

よって、直前の段落で筆者に問いかけられていた

「父」が、「おもしろがった(＝興じき)」の主語だとわかる。

なお、この話において、筆者は「父」の答えに対してさらに追い込むような質問を続けている。その結果、「父」は答えることができなくなってしまうたのである。